
日本キャリア教育学会ニュースレター
2024年度・夏号（2024.7.31発行）

発行：日本キャリア教育学会 情報委員会
<http://jssce.wdc-jp.com/>

※ニュースレターは基本的に春夏秋冬の年4回配信しています。

※2024年度の特集テーマを「個人と社会のウェルビーイングを実現するキャリア教育」と設定しました。

※ニュースレターのバックナンバーは下記 URL から読めます。
http://jssce.wdc-jp.com/committee/information_comm/

+ +
目次

【特集テーマの趣旨】

【特集】 個人と社会のウェルビーイングを実現するキャリア教育
～家庭でのウェルビーイング～

小林穂高（三重県名張市立病院）

松下琴乃（ライフコーチ）

田草川かおる（暁コーチング）

池田幸恭（和洋女子大学人文学部）

山崎梓（認定特定非営利活動法人育て上げネット）

【書 評】

『日本キャリアカウンセリング史：正しい理解と実践のために』京
免徹雄（筑波大学）

『成功する就活の教科書 ー幸せな人生キャリアのためにー』松尾
千晶（京都産業大学）

【お知らせ】

[第46回研究大会](#)

[学会への寄贈図書一覧（2024年5月～7月）](#)

【特集テーマの趣旨】

2024年度は特集として、多様な場におけるウェルビーイングに着目します。2023年5月に閣議決定された第4期教育振興基本計画では、日本社会に根差したウェルビーイングの向上が柱の1つとして掲げられました。

「ウェルビーイング」とは、身体的・精神的・社会的に良い状態にあることを意味し、短期的な幸福のみならず、生きがいや人生の意義など将来にわたる持続可能な幸福を含む概念です。「日本社会に根差した」とは、自己肯定感など個人が獲得・達成する能力や状態に基づくウェルビーイング（獲得的要素）のみならず、協働性など人とのつながり・関係性に基づくウェルビーイング（協調的要素）にも着目し、両者を調和させて一体的に育んでいくことを意味します。

人生における様々な場において、個人と集団のウェルビーイングを確保していくために、キャリア教育はどのような役割を果たすことができるのか、みなさんと一緒に考えていきたいと思えます。春号は「学校」（4月末発行）、夏号は「家庭」（7月末発行）、秋号は「職場」（10月末発行）、冬号（1月末発行）は「地域」に着目し、関係者から寄稿していただきます。

【特集】 個人と社会のウェルビーイングを実現するキャリア教育
～家庭でのウェルビーイング～

子育て支援の現場における子どもと保護者と支援者の
ウェルビーイング

小林穂高

三重県名張市立病院 副診療部長（小児科）

1. 子どものこころの診療現場

私は小児科医であり、市中病院の勤務医です。三重県の地方都市の公務員でもあるので、地域の子育て支援チームのメンバーとして、市の保健師、教員、保育士、福祉担当の方たち、県の児童相談所の方たちと一緒に仕事をしています。小児科医なのでインフルエンザなどの急性感染症や気管支喘息のような慢性疾患の診療もしていますが、ほとんどの診療時間を専門である「子どものこころの診療」に費やしています。子どものこころの診療で私が受け持っているのは、発達障害、心身症（起立性調節障害や摂食障害など）、「不登校」、合併する精神疾患、そしてその子どもたちの保護者支援です。「保護者支援」なんていうと、保護者の心理的なサポートをしているようなイメージが浮かぶかもしれませんが。そんな「保護者支援」が看板の表面であるとすれば、看板の裏面は「子ども虐待の予防」そして「現在進行形の虐待事例への対応」です。これ、本当に表裏一体です。またそれとは別に、私は児童相談所の一時保護所での仕事を始めて15年になります。そこでの仕事は、主に虐待や非行で一時保護された子どもと出会い、面接を行い、ケースワーカーと心理士とケース検討を行うことです。

私は本稿で小児科医として「子どものウェルビーイング」について語ろうとしています。WHOの規定する「健康」とは「身体的・精神的・社会的なウェルビーイングが満たされた状態のことであり、単に病気をしていないということや精神的に弱くないことを指すものではない」となっています¹⁾。ただ、正直に白状しますと、私が医療現場でこの「ウェルビーイング」という言葉を使ったことは今まで一度もなかったかもしれません。

2. 小児科外来から見える子どものウェルビーイング

小児科外来の診察室での一場面を紹介しましょう。先日来られた発達障害の子どもを育てるお母さんが涙ながらに次のように話してくれました。

「私も人間ですからついつい子どもを怒鳴ってしまいます。時にはカチンときて手が出てしまうこともあります。近所の方が見たら、私がこの子にしていることは虐待に見えるかもしれません。正直、

虐待のニュースを見ても、人ごとには思えません。本当にこの子への対応が難しく、どうすればいいのかわからないのです。」これは架空のケースですが、このような相談を非常に多く受けます。このお母さんは、もし子どもが発達障害を持っていなかったら、また別の子育てがあったでしょう。そして、別の思い描いていた理想の生活があり、別のご自身のキャリアプランがあったかもしれません。発達障害の子どもを育てる保護者は、障害を「受容する気持ち」と「否定したい気持ち」の間で揺れ動くことが知られています（中田の螺旋モデル²⁾）。その揺れているつらい思いを診察室で吐き出しているのです。医師としてできることは、保護者の「しんどい思い」を傾聴し、困難な子育てに伴走し、医学的に必要な対応や道筋を示し、一緒に考えることです³⁾。主治医は発達障害の子どものウェルビーイングを考えて関わるべきかもしれません。しかしウェルビーイングに思いをはせながら診療することは、なんだか遠い世界のように感じてしまいます。

3. 子どもの支援者自身のウェルビーイング

では、実際の子育て支援現場はどうでしょうか。障害を持つ子どもや保護者の状況については既に述べましたが、実は医師も支援者も自らや家族に病気や障害を抱えていたりします。私はたとえば、朝から夜まで外来診療、患者さんに長い時間待ついただくこともしばしばです。自分の昼食の時間を確保できるかどうかは常にギリギリで、合間を見つけてカロリーメイトをかじることで低血糖を予防しています。こんな生活を続けることは、不健康ってことは百も承知です。私だけではなく、子どもの支援現場では、支援者の多くが「こころも身体も至って健康」とは口が裂けても言えないようなギリギリの状態、子どもや保護者を何とか地域で踏ん張って支える仕事をしているように見えます。ただ、やはり子どものウェルビーイングを実現していくためには、まずは子どもの保護者が、子どもが園や学校で出会う保育士や先生が、地域の保健師が、そして私のような医師が、つまり子どもの周りにいる大人たちが、心身ともに「ある程度」元気でなければならぬと思います。支援者が「心身ともにある程度元気」であるためには、支援者が難しいケースに直面した際に孤立しないための仕組み作りが必要です。孤独になりがちな支援者が地域で踏ん張って支え続けるためには支援者同士がつながり、「相談のハードルが低い」職種間の連携システムが必要だ

と思います。連携しやすいシステム自体が、そこに所属する支援者をサポートし、そのことが地域の子ども支援を持続可能なものにしていくと思っています。

4. 虐待を受けた子どもたちのウェルビーイング

「病気や障害のある子どもの家庭でのウェルビーイング」というテーマをいただき、最初に私が思ったのは、not well-being な子どもたち、端的にいうと「虐待を受けた子どもたち」のことです。日本の児童虐待は、定義上「加害者」が養育者なので、(狭義の)子ども虐待が起きる場所は必然的に「家庭」が多くなります。そんな家庭でのウェルビーイングについて私は今、語るべき言葉を持ち合わせていません。虐待があり、家庭がその子どもにとって安全でないと判断された場合、その子は一時保護されます。私が一時保護所で出会う子どもたちには様々な子どもがいますが、大半の子どもの行動上、発達上の課題を持っています。一時保護された子どもの6.3%が療育手帳を所持し、21.1%に発達障害の診断が既についているという報告があります⁴⁾。一時保護された子どもが多動で衝動性が高く、すぐに暴言や暴力が出てしまう場合、一時保護所のワーカーさんから「これは発達障害特性があるからでしょうか、育ってきた中で虐待された影響が大きいのでしょうか」とよく医学的判断を問われます。ほとんどの子どもがおそらく両方の要因をもっていると考えられます(が本当のところは分かりません)。よくよく話を聴くとその保護者も同様の特性をもつことが疑われ、また保護者自身が虐待のサバイバーだったりします。子ども虐待は到底ゆるされることではありません。しかし子どもも保護者もおそらくやむにやまれぬ事情があり、一時保護されるまでいろんなことがあったのだらうと思います。そして多くの子どもは一時保護された後も、自分の家庭に帰りたいと言うのです。そんな状況になってもなお、その子どもが帰りたいと望む家庭は、その子にとってのウェルビーイングな居場所になるのでしょうか。子どもにとっては(多くの場合)生まれてからひどい目に遭ってきたとしても、その家が唯一の自分の家です。その親が唯一の自分の親です。その家庭を、その親を、知らない大人から「ひどいね」といわれることは、それもまたトラウマ体験になるのかもしれませんが。ただ、やはり安全な環境で生活をしていく中で、子どもの行動上の問題が改善していくことも事実です。そしてその先に子どもの安全な生活が続くことを期待します。子どもに

とっての逆境的体験をこれ以上しないように環境調整を行うこと、子どもの権利が擁護された環境の中で生活できるようにすることが私たちの役割です。現実的には、一時保護された子どもの多くがまた元の家庭に帰っていきます。子どもたちにとって、いつもの家庭での（私から見れば）過酷な生活がまた始まります。私たちは児童相談所から連絡を受け、各々役割を確認し、その家庭を地域で見守り、支えていく日々がまた始まるのです。

<参考文献>

- 1) 溝上慎一：幸福と訳すな！ ウェルビーイング論 自身のライフ構築を目指して、東信堂,2023
- 2) 中田洋二郎：発達障害のある子と家族の支援—問題解決のために支援者と家族が知っておきたいこと、学研,2018
- 3) 小林穂高：家族支援、初学者のための小児心身医学テキスト、日本小児心身医学会（編）、南江堂,2018
- 4) 和田一郎、山本恒雄、堤ちはるら：一時保護所の支援の充実—一時保護所の概要把握と入所児童の実態調査—,日本子ども家庭総合研究所紀要/日本子ども家庭総合研究所研究企画・情報部 編 50 59-131, 2013

家庭でのウェルビーイングを考える

松下琴乃

ライフコーチ

ARUKUKI 株式会社 取締役

私の仕事は、「ライフコーチ」。一般的には、あまりなじみのない職業かもしれません。クライアントの目標や人生のビジョンを明確にし、それを実現するためのサポートをする専門職です。「答えはクライアントの中にある」「クライアントは課題を乗り越える力を持っている」ということを軸に、伴走型のアプローチで個人や組織を支援しています。私は自他共に認める「成長オタク」です。個人や組織が成長し、少しずつ色々なことが出来るようになる様子、自らの力で行きたい方向に舵を切る姿を見ることに喜びを感じています。私が持つテーマの一つに「家族」があります。家庭環境がその人の

人格形成や価値観、コミュニケーション能力に大きな影響を与えることを実感しているためです。家庭でのウェルビーイングは、個人が自己肯定感を持ち社会で活躍する力を育む土台となります。家庭には多様な在り方やスタイルがあるため、一概に「このような家庭の形が良いのである！」というものを示すことが出来ませんが、各々が自分の家庭に焦点をあてて「我が家におけるウェルビーイングとは？」というテーマと向き合うことが重要だと考えています。我が家はステップファミリーであることもあり、多くの課題がありました。例えば、再婚の際の子どもからの反対、新しい親子関係を再構築する中でのストレスや価値観や生活習慣の衝突などです。私自身がコーチングを通じて人を支援する立場にいるものの、家庭でのウェルビーイングに関しては思うようにいかないことも多く、現在進行形で学びが多い日々を過ごしています。しかし、今では凸凹ながらも日々の生活を楽しめるようになりました。今回は私が実践してみて良かったと思える家庭でのウェルビーイングを向上させるための具体的なアプローチをご紹介します。このアプローチはコーチングでも使っているものなので汎用性の高いものですが、あくまでも1つのケースとして読んでいただけたら幸いです。

1. 一緒にいること

人は一緒に時間を過ごしていたとしても、意識が他のことに向いている場合、本質的には「一緒にいる」ということにはなりません。例えば、一人はスマートフォンでショッピング、もう一人はオンラインゲームをしていたら一緒にいる感じはしないですね。大切なのは目の前の人に意識を向けるということです。我が家では夕食は家族全員でとるようにし、日々の出来事や気になることを話します。この時間が安心できるひと時となっています。

2. 役割と個人のバランス

家庭内では家族それぞれが持つ役割と個人としての側面をバランスよく理解することが重要です。例えば、私は「母」や「妻」という役割を持っていますが、同時に一人の人間としてのアイデンティティを持っています。もし私が「母」という役割だけを100%担っていたら、我が家の場合はうまくいかなかったでしょう。私は「母」として子どもたちを愛し、育て、教育することに責任を持っていますが、「妻」であることも、一人の人間として生きることも大切にし

ています。家族全員がお互いに多面的な存在であるということを認め合うことで、自分らしさを出しやすい土壌が育まれているように感じます。

3.健全な喧嘩

喧嘩は一見ネガティブなものに思えますが、実は家庭でのウェルビーイングにとって重要なポイントであると考えています。なぜなら、喧嘩を通じて感情を発散させたり、潜在的な問題を言語化することが出来たり、普段は言えないような本音を出すことが出来るからです。ただし、喧嘩の際でも相手を一人の人間として尊重するというスタンスが大切です。お互いにどのようなことを主張したくてこの喧嘩が起こっているのかに焦点をあてます。天気と同じように家庭の中にも「晴」「くもり」「雨」があっても良いと思うのです。我が家は喧嘩をする度に家庭という土壌が豊かになっている印象があります。

4.主語を家族にして話す

家庭でのウェルビーイングを高めるために、我が家では定期的に主語を「私」ではなく「私たち」に変えて話をするようにしています。家族を主語にして話をする、「私たちにとっての心地よさって何だろう？」という具合に、個人ではなく家族の話をする事ができます。もちろん「私はこうしたい！」という個人の話も大切です。我が家では個人も尊重しながら、「家族」を主語に定期的に話すことが出来たことで、より家族のつながりを感じられるようになりました。ときには、第三者（コーチ）に入ってもらい言語化をサポートしてもらうこともあります。

終わりに

家庭でのウェルビーイングは、個人や家族全体の幸せに留まらず社会の幸せに直結する重要なテーマです。100 の家庭があったら、100 通りのウェルビーイングの在り方があり、実践スタイルがあるはずです。皆さまのご家庭はどのようなことを大切にされているでしょうか。我が家でも引き続き、楽しみながら探求と実践を繰り返していきます。

モンテッソーリで育むウェルビーイング

田草川かおる

暁コーチング

ISMS Parent Guide

私は現在、オーストラリアのシドニーにあるモンテッソーリ幼稚園で親子教室を担当している傍ら、世界各地で子育てに励む保護者（主に母親）を対象に子育てや自身の在り方を考えるコーチングを提供しています。

モンテッソーリと言えば、棋士の藤井聡太さんが通った幼稚園として耳にされた方もいらっしゃるかもしれませんが、その歴史は古く、1900年初頭にイタリアで初めて女性医学博士となったマリア・モンテッソーリが考案し、世界各地に広まった教育学を元としています。その根底には「全ての子どもは自立のための道を歩んでいる」というものがあり、自己決定権と自己実現を繰り返し、自分らしく生きられる喜びを感じるという、ウェルビーイングにつながるものが流れていると言えるでしょう。

■子どもはすべてを持って生まれてくる

皆さんは生まれたばかりの赤ちゃんを見ると、何を思いますか？何も知らない、何もできない、大人の庇護が必要な存在として見ていませんか？確かに、生後間もない人間の子どもは大人の助けが無いと生きていくのは難しいかもしれません。でも、モンテッソーリ博士の視点から見ると、子どもはすべてを持って生まれ、時間をかけて肉体的機能を磨き、大人が思っている以上の速さで自立する可能性を持っています。子どもの自立を奪っているのは「この子は何もできない」という大人の偏見にすぎません。一度その偏見を外し、子どもを「完璧な存在」として捉えた時、足りないところを埋めるための経験と時間を大人が用意できたら、子どもはどんなに素晴らしい成長を遂げるでしょう。モンテッソーリは子どもの代弁者として、まだ言葉を持たない彼らの「自分でやりたい」という願いを実現するための環境を整え、大人が障害物とならないための心構えを説いています。大人が邪魔をしないとは、何もしないということ

はありません。むしろ、大人は積極的に子どもを観察し、その瞬間に必要としている経験を提供するために最大限の努力をする必要があります。

■モンテッソーリとウェルビーイングの因果関係

私がモンテッソーリに初めて出会ったのは、長女が2歳の頃でした。初めて訪れた親子教室で、まだ歩き始めたばかりの子が庭からミントを摘んできて「お茶」として差し出してくれた時の衝撃は今でも忘れられません。子どもの大きさに合わせた家具が置かれた部屋の落ち着いた雰囲気、一つひとつのことに丁寧に取り組み集中する姿、やり遂げた時の満足そうな表情に魅了されました。

それから12年経ちますが、モンテッソーリで育った3人の子ども達を見ても、幼い頃から自分を尊重され、自己決定権を与えられた子が、どれだけ自信に満ち、充実した日々を過せるかを実感しています。小学5年生の時に自分の進路を決め、奨学金を得て中高私立一貫校に進学した長女。8歳の誕生日に、自分に贈り物をするのではなく、困っている子供達を支援して欲しいと友達、地域住民の方をお願いしてユニセフに1200ドルの寄付をした長男。毎週兄のクラブ活動を待つ間に校内のゴミ拾いを続けて表彰された次女。それぞれが自分の役割を考えて、周囲に助けを求めながら自己実現をしていく姿を見ていると、モンテッソーリ教育を信じて良かったと心の底から思います。

2021年にヴァージニア大学で行われた幼少期のモンテッソーリ教育と成人時のウェルビーイングの関係を調査したでも、最低2年モンテッソーリの教育を受けた子どもの方が成人時にウェルビーイングを感じる度合いが強いという結果が出ています¹⁾。ウェルビーイングの測定方法についてはオンライン調査を用いて心理的・社会的ウェルビーイングや、人生に対する満足度などを含む項目を質問した後に、本人自身の幼少期における家庭環境（経済的なものを含む）、学んできた学校を設問として聞いています。アメリカには公立のモンテッソーリ教育もあり、またモンテッソーリ以外の私立教育を受けた人達も調査対象となっているため、幼少期の家庭環境が与える影響に限らず、自分で選択できる自由や「意味のある」本物を用いた体験、異年齢の子ども達と過ごすことで培われる思いやりなどが、大人になってからのウェルビーイングに強く影響していると言えるでしょう。

■子ども達が教えてくれること

現在、私は主にまだ非言語の子ども達（3歳以下）とその保護者と過ごすことが多いため、子どもの将来（ある意味でのウェルビーイング）に対する不安を耳にすることが多々あります。お稽古事や学校選び、友達などの人間関係、授業についていけるのかなど、子どもに関する親の不安は尽きません。その際、決まって伝えるのが「答えは子どもが知っている」です。大人としてできることは子どもを幸せにすることではなく、子どもが自分で幸せになる方法を伝えること、です。そして子どもはいつだって、自分が幸せになる方法を知っています。大人からしてみたら、なんでそんなことを毎日しているのかと呆れるようなことが、子どもにとって意味のあることだったりします。敏感期と呼ばれる、好奇心が最大になる限られたタイミングで、やりたいことをやり尽くした子どもは、自然と幸せになる方法を身につけていきます。子どもと関わるからには、これからも子どもに学ばせてもらう気持ちで、日々新しい気持ちで観察を継続していくつもりです。そして必要なタイミングでコーチングの質問を投げかけながら、子どもも大人もウェルビーイングを高めていけるようにサポートしていきたいです。

<参考文献>

- 1) Lillard, A.S., Meyer, M.J., Vasc, D., Fukuda, E. (2021) An Association Between Montessori Education in Childhood and Adult Wellbeing

ペアレントクラシーからみた家庭でのウェルビーイングと
キャリア教育

池田幸恭
和洋女子大学人文学部 教授

ウェルビーイングとキャリア教育の両方において、家庭の重要性は指摘されてきました。たとえば経済協力開発機構（OECD）による「こどものウェルビーイング測定の概念的フレームワーク」（2021年）では「こどものウェルビーイングのアウトカム（成果）」、「こど

もの活動、行動、人間関係」、「こどもの環境」、「公共政策」のレベルを示し、ウェルビーイングに関連する「こどもの活動、行動、人間関係」の一つとして「家庭活動・人間関係」、「こどもの環境」の一つとして「家庭・家庭環境」を位置づけています（こども家庭庁・エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ, 2024）。

他方で文部科学省（2022, 2023）による「キャリア教育の手引き」では、学校、家庭、地域の連携・協働がキャリア教育の推進に重要であるとして、家庭教育の在り方、働くことに対する保護者の考え方や態度が生徒の発達に大きな影響を及ぼすことを指摘しています。また、豊（2007）は、職業選択に対して家庭が強い影響力を持っており、親との将来に関するコミュニケーションの有無が児童生徒のキャリア発達と関係することを報告しています。このような家庭の重要性は、「家庭環境を豊かにする」ことに加えて、「家庭環境に困難を抱えている子どもはどうすればよいのか」という問題を喚起します。2021年のユーキャン新語・流行語大賞では、ガチャガチャで出てくるアイテムのように親は自分で選べないことを表した「親ガチャ」という言葉が選出されました。志水（2022）は、イギリスの教育社会学者であるブラウン, P.が提唱した「ペアレントクラシー」という概念を紹介しています。これは「ペアレント（親）」と「～の支配」を表す「クラシー」を組み合わせた用語であり、家族が所有する各種の「富」と、親が子どもに対して持つ「願望」が、子どもの人生行路にきわめて大きな影響力を及ぼすことを意味します（Brown, 1990; 志水, 2022）。身分や家柄によって個人の人生のおおかたが定められるような身分社会である「アリスト（貴族）クラシー」から個人の能力と努力が組み合わされた結果として人生が切り拓かれていくような「メリト（業績）クラシー」へ転換し、これが進行することで「ペアレントクラシー」が立ち現れてきたと考えられています。一見、選択の自由を最大限に尊重して、子どもの努力が結果に結びつくように見える社会が、実際には家庭の状況によって個人の選択や努力の可能性そのものが制限されてしまっているといえます。この実態として、子どもや若者の間で見られる各種の格差があると指摘されています。

ペアレントクラシーからみた家庭でのウェルビーイングとキャリア教育について、次の3つの観点が大切になると考えます。第1に、子どもは親からの自立をとおして、家庭による影響を脱していく過程がみられることです。このことは、子どもが親から受けてきた影

響を自覚的に問い直し、自らのキャリアを形成していくことにもつながります。第2に、子どもだけでなく、親もまた自分の人生を生きる主体であることです。親のウェルビーイングの実感が家庭でのウェルビーイングを育て、また親自身がキャリア発達に取り組む姿が子どものキャリア発達を促すといえます。第3に、親子の発達を妨げるような社会的影響がみられる場合があることです。志水（2022）が指摘するように、実態としてのペアレントクラシーは「子どもに幸せな生活を送ってほしい」という親の願いが生み出しています。親が子どものためを思う行動が、ペアレントクラシーを加速させてしまうのです。ここでは「自分さえよければよい」、「自分たち家族だけが幸せならよい」ということを越えて、個人と社会のウェルビーイングに目を向けることが重要になります。すなわち、家庭でのウェルビーイングは家庭だけでは実現できないといえます。家庭のウェルビーイングを考える手がかりになり、子どもや親の両方を支えるという意味でも、キャリア教育は大きな力を持っています。

<参考文献>

- 1) Brown, P: (1990). The 'Third Wave': education and the ideology of partocracy. *British Journal of Sociology of Education*, 11 (1), 65-85.
- 2) こども家庭庁・エム・アール・アイ リサーチアソシエイツ:2024. 諸外国等におけるこどものウェルビーイングの概念と測定方法に関する調査報告書.
<https://www.cfa.go.jp/policies/kodomo-research>(2024年7月15日閲覧)
- 3) 文部科学省:2022.小学校キャリア教育の手引き.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/mext_01951.html (2024年7月15日閲覧)
- 4) 文部科学省:2023.中学校・高等学校キャリア教育の手引き.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/mext_00010.html (2024年7月15日閲覧)
- 5) 志水宏吉:2022.ペアレントクラシー:「親格差時代」の衝撃.
朝日新聞出版
- 6) 豊浩子:2007.親とのコミュニケーションがキャリア発達に与える影響 国立教育政策研究所(編):2007.キャリア教育への招待.東

家庭もまた、社会から孤立する

山崎梢

認定特定非営利活動法人育て上げネット

育て上げネットは「若者と社会をつなぐ」をミッションに掲げ、若者を支えるNPOです。東京・立川に拠点を構えて20年が経ち、いわゆるひきこもりやニート状態、また、最近では夜の繁華街に繰り出すトー横キッズなどと呼ばれる層、そして少年院を経験する少年たちなど、枚挙にいとまがない悩みに直面する若者と出会い、社会とのつながる応援しています。彼らに共通するのは学校や会社など孤立を経験しているということです。私たちはそうした状態を「社会的孤立」と表現しています。孤立した若者の自尊心が保つ砦になるのが家庭です。しかし、その家庭からも孤立して、誰とも関わりを持たない孤独に至る若者も少なからずいます。若者支援において、家庭は重要なアプローチ先です。若者自身が「支援を受けたい」と問い合わせをすることは稀であり、最も身近な親をアウトリーチ先としている意味合いもありますが、もうひとつには、親子関係の不和が、子（若者）の社会参加を妨げ、ともすると孤立を加速させるケースもあるからです。

ある男性は大学4年時の就職活動で親から言われた言葉に苦しみ続けました。リーマンショックの時世に、どうにか勝ち取った中小企業の内定通知。嬉々として父に伝えたところ、返ってきた言葉は「俺の知らない名前の会社なんかに入ったって意味がない、そんなところ蹴れ」という突き放した一言。父親は、発破をかけたつもりでした。大学まで出て、こんな結果に満足するのかという激励の気持ちの表れだったそうです。しかし、当人からすればエントリーシートを書いては、たった一通のお祈りメールで縁を切られる…そんな就活の末に掴んだ貴重な結果です。彼はそのひとことで自分のすべてを否定された気持ちになり大学にも通うことができなくなってしまいました。あと半年というところで休学を決め、最終的には中退の道を選んでいきます。退学後はひきこもり状態に陥ります。父の

言葉に反論も擁護もしてくれなかった母親もまた信じられず、自室のみがこの世界の安全地帯となりました。一方で、その部屋は親が用意したもので、食べ物もなにもかも親がいなくては手に入らない。不信な存在である親なくては、なにもひとつできない自らの不能さが自己否定のサイクルを加速させ、どうにかしたいけど、どうにもできない。そんな日々が続いていたそうです。2年近く経とうとしたころ、両親が揃って育て上げネットが運営する家族相談プログラム「結（ゆい）」の相談にいらっしゃいました。両親ともに、子どもの接し方がわからないと悩んでいる、に始まったことでなく、ずっと昔からそうだったと吐露されたのです。核家族化が進み、隣人のこともよく知らない……なんてことが珍しくない現代社会では、誰からも「子育て」を教わることがない家庭もあります。この家庭では周りよりも子どもができるのが遅く、小・中学校のときから周りとの世代差を感じてコミュニティにうまく馴染めないでいたこともわかりました。「結」を利用するようになって親子は家族についての相談場所を得ました。朝の挨拶や手紙のやりとりなど、わずかなコミュニケーションからはじめました。次第に親子間の関係性は改善され、その後、男性は就労支援プログラムを利用するに至りました。大学ではサークル活動にも参加していて社交性のある方だったので、仕事体験先のIT企業が気に入ってそのまま就職していきました。両親へインタビューで印象的だったことを聞くと、他の利用者との「茶話会」だと教えてくださいました。周りがどんな子育てをしているのか、近しい経験をする人たちがどうやって家族関係を取り戻したのか。リアルな声が学びになったのだそうです。

こうしたケースから私たちが考えるべきなのは、労働者として、また、地域のひとりとして社会参加する親であっても子育ての側面では孤立するということです。自立までの大部分を家庭に頼る日本社会では、若者の孤立は家庭内の問題や自己責任と捉えられがちです。そんな社会ではひきこもる我が子の相談をするのは非常に難しくなります。家庭がダメなら他のコミュニティが代わりに話を聞き、社会参加の機会をつくるのが柔軟な社会ではありますが、その提示がない現状があります。直近では、“居場所”や“コミュニティ”と呼ばれる取り組みが若者支援のトレンドになりつつあります。私たちも「夜のユースセンター」や「育て上げFC（サッカーチーム）」という名称で、そうした場を作る活動を展開しています。従来の支援との違いは、悩みや困りごとありきの場所ではないということです。

スポーツや音楽、ハンドメイドやプログラミングなど若者の要求に応える場を作り、まずは誰かとつながりを感じてもらおうのです。関係構築が進んでいけばおのずと、悩みや課題は可視化され、解決に向けた従来の支援へとつながっていきます。

今後も家庭が重要な役割であることは変わりませんが、同時に多様なコミュニティが若者を受け入れ、自立や成長に一役買うことが重要なのではないのでしょうか。

【書評】

『日本キャリアカウンセリング史：正しい理解と実践のために』

『日本キャリアカウンセリング史：正しい理解と実践のために』
(渡部昌平・浅野浩美・立野了嗣・小澤康司・下村英雄・三村隆男
(著)

実業之日本社 2024)

<https://www.j-n.co.jp/books/978-4-408-41685-4/>

京免徹雄（筑波大学）

本書は、日本におけるキャリアカウンセリングの導入・発展を牽引してきた著者6名による、歴史の整理である。歴史は、出来事が史料として残され、それが意味づけられることで成立するといわれるが、本書においても事実だけでなく、それぞれの著者の価値判断が示されている点に特徴がある。まずは、その内容を概観してみたい。

第1部（1～3章）では、キャリアコンサルタント制度の歴史と、キャリアカウンセリング導入に中心的に関わった2つの団体の役割が記述されている。バブル崩壊後に産業構造が変化する中で、中高年ホワイトカラーを主体的に学ばせることを目的に、キャリアコンサルティング政策は始まる。その後、若年者雇用対策が直接の契機となって2016年に国家資格化された。しかし、その背景には、民間団体による長年の努力と蓄積がある。日本キャリア開発協会（JCDA）は全米キャリア開発協会（NCDA）と連携し、1999年からCDA（Career Development Advisor）の養成・認定を開始した。また日本キャリア・カウンセリング研究会（JCC）は、米国での理論・実践

をもとに日本版 CDP (Career Development Program) を構築し、企業等にワークショップを提供し続けてきた。本書では、これらの過程が丹念に描かれている。

第 2 部 (4~6 章) では、労働分野と教育分野の歴史、および歴史を学ぶ意味について論じられている。戦前に始まった企業内の人事相談は、戦後にケースワークおよびホーソン研究と結びつくことで産業人事相談に発展する。1960 年代にはロジャーズやマズローを理論的背景とする産業カウンセリングが成立し、1970 年代に一時的に下火になるものの、1980 年代になると CDP の紹介などによって広がりを見せていった。教育分野では、1919 年に大阪市立児童相談所において児童救済として職業指導が始まり、その後、職業紹介における連携を契機に小学校に拡大していく。普及にあたっては、大日本職業指導協会が重要な役割を果たした。最終章では、キャリアカウンセリングの理論・ツール・用語などの変遷に言及した上で、歴史を学ぶ意義について、理論や技法をブラッシュアップするとともに「よりよい未来を考える」ことにあると締め括られている。

ここからは、評者の専門領域が教育学のため、教育分野の歴史 (第 5 章) について雑感を書くことをお許しいただきたい。戦後について進路指導・キャリア教育の政策を中心に分かりやすくまとめられているが、「カウンセリング史」と銘打つからには、学校教育に米国からガイダンスとカウンセリングが持ち込まれた経緯に言及してもよかったのではないかと感じる。民間情報教育局 (CIE) の主導した教育指導者講習 (IFEL) を通して伝えられたガイダンスでは、教師を指導専任者 (counselor) として配置する構想もあった。しかし、1975 年に制度化された進路指導主事・生徒指導主事は、特殊な訓練をする必要とする相談者ではなく、学校全体の連絡調整を担う充て職であった。1990 年代以降、その穴を埋めるかのように臨床心理士とカウンセリングが結び付き、セラピストとしてのカウンセラーが配置されていく。こうした歴史は、スクールカウンセラーがキャリア教育にほとんど参画しない、キャリアカウンセリングの主たる担い手が教師という、米国と全く異なる状況を招いている点で看過できない。

もっとも、限られた紙幅でコンパクトに歴史を整理することが目的の本書において、学校カウンセリング全体を射程に入れよというのは無理があるかもしれない。これはむしろ、歴史や現状をどう評価するかも含めて、評者を含めた本学会の会員に残された課題だろう。私事になって恐縮だが、今年度から心理学・教育学を専門とす

る会員6名で「児童生徒のキャリア発達を支える教師と心理職の協働システムに関する国際比較研究」という共同研究をスタートさせた（<https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-24K00409/>）。

本書から学んだことを生かしつつ、学校教育におけるキャリア心理職の参入、さらに教師との協働の可能性を検討したいと考えている。

最後に、日本教育史の大家である唐澤富太郎は、1953年の著作で「創造的な時代においてこそ却つて過去を厳しく批判し、過去を否定的に媒介することによつてのみ創造は可能となる」と書いている。ここでの批判・否定とは過去との断絶ではなく、吟味的な対話のことを指す。ぜひ多くの会員に本書を手にとっていただき、自分なりの視点で過去と対話し、意味づけてみてほしい。

【書評】

『成功する就活の教科書 ―幸せな人生キャリアのために―』

『成功する就活の教科書 ―幸せな人生キャリアのために―』

(山岸慎司(著) 中央経済社 2024)

<https://www.biz-book.jp/isbn/978-4-502-49421-5>

松尾智晶（京都産業大学）

本書は、ビジネスの現場で活躍された後、現在は企業研修講師及び大学におけるキャリア教育講師・キャリア支援相談員として活躍されている著者が『大学生や若者、その保護者やキャリア指導の方々の参考になる』（p.193）ことを願い執筆されたものである。筆者は大学生のキャリア支援をする中で、若者が将来に希望をもちにくくなっていること、不安が強く悲観的であることを憂慮し、それらを意識した上で就職活動の取り組み方・ノウハウに加えて長期的なキャリア形成の指針たり得ることを意図して書かれたのが本書である。20章で構成されているが、「はじめに」で『どこから読み始めていただいても構いません』と記されるように、各章ごとに完結した内容となっている。そのため我々読者は興味関心のある内容から読み始めることが可能であり、実践にあたり必要に応じた読み方ができ

る。以下に概要を紹介し、最後に評者の所感を述べる。

本書は、第1部『21世紀のキャリアデザイン』、第2部『成功する就職活動のポイント』、第3部『近未来社会と働き方の変化』の3部から成る。各タイトルから筆者の、中長期的な視点を持ちながら就職活動を進めてほしいという意図が感じられる。我々キャリア教育・キャリア形成支援に携わる者が、備えておくべき視点であるともいえる。

第1部『21世紀のキャリアデザイン』(1~7章)では読者として想定される大学生が生きていく社会のありようとして、人口変動、業界及び雇用システムの変化、仕事の変容が示されたうえで実践に資するキャリア理論が紹介される。第5章でホルランドのRIASECやキャリア・アンカーなどの基本的なキャリア理論、第6章でクランボルツの計画的偶発性理論やプロティアン・キャリアなどの最近のキャリア理論、そして第7章でキャリア開発に必要な力として近年のキャリア形成に関する概念である「エンプロイアビリティ」「リスクリング」などが解説されており、キャリア教育で取り扱う内容を概略的に理解できる。

第2部『成功する就職活動のポイント』(8~15章)は、ノウハウ紹介の側面が強く、就職活動をする大学生本人に加えて保護者やキャリア指導担当者が即、実践の参考にできる内容である。企業分析と自己分析の方法、就職先の業界を絞り込む際の視点、エントリーシートの書き方や面接のポイントが具体的に示されており、これらを読むことで大学生は就職活動の概要を理解し自分の個性を活かした就職活動を進めることが可能であろう。章のタイトルに「就職にお勧めの業界」「成功する就職活動」とあるが内容を読み進めると、著者がその業界を勧める理由や著者が想定する就職活動の成功とは何かについて、具体的かつデータを用いて解説されており、一つの考え方として参考になる。キャリア形成支援の担当者にとっては、著者の見方、考え方に相対して自らは進路選択・就職活動支援にあたりどのような観点をもってそれらをおこなっているか、という自省にも資する内容である。

第3部『近未来社会と働き方の変化』(16~20章)では、「ワークライフバランス」「ダイバーシティ」「アフターコロナ」「新しい働き方」などのキーワードが含まれた章タイトルが並び、企業での勤務経験があり現在も企業研修講師をされている筆者からみた職場と働き方、社会の変化がキーワードごとに紹介されている。

最終章の 20 章は、就職活動・キャリア開発に対する筆者の思いが直接的に表現されており、こうしてみよう、こうすれば OK、仕事のやりがいなどの著者の考えが示されている。若者がその個性や特性を活かして、何度でもチャレンジできる、学び直せるという励ましのようにも読み取れる文章は、不安や悲観的な思いを超えて若者が前向きに就職活動に取り組むための背中を押す内容である。

読者諸兄は周知のことと拝察するが、労働研究の嚆矢といわれる尾高邦雄『職業社会学』（1941）において職業 33 要素、1) 生計維持（経済的側面）、2) 個性の発揮（個人的側面）、3) 社会的連帯の実現（社会的側面）が示された。評者は、職業選択のプロセスである就職活動を題材とした本書は、特に 2) と 3) に力点が置かれていることが特徴的だととらえた。職業選択において経済的側面は無論重要であるが、『幸せな人生キャリア』を歩むには、著者が本書で度々言及するように社会の変化と自分のありようを理解し、両者のバランスをとることが肝要である。キャリア教育は「社会的・職業的自立」を目指し、「社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現する過程」であるキャリア発達を促す教育であり、本書は『成功する就活の教科書』と銘打たれてはいるがキャリア教育に携わる我々が備えておくべき視点を提供してくれる一冊である。

■ -----
【お知らせ】 第 46 回研究大会

テーマ：集い・奏で・響きあうキャリア教育
ーサステイナブルな未来へー

日 時： 2024 年 10 月 19 日（土）、20 日（日）

場 所： 上越教育大学（〒943-8512 新潟県上越市山屋敷町 1 番地）

詳細は大会ウェブサイト（<https://jssce2024.com>）受付終了

問い合わせ先： jssce2024@gmail.com

実行委員長：山田智之（上越教育大学）

■ -----
【お知らせ】 学会への寄贈図書一覧（2024 年 5 月～7 月）

以下の図書につきまして、著者より本学会にご寄贈いただきました。

ここに感謝申し上げます。

- ・三村隆男（編著）『生徒の心に寄り添う進路指導の言葉かけ～キャリア・カウンセリングの視点を生かして～』東洋館出版社、2024年

<https://www.toyokan.co.jp/products/5448>

- ・新居田久美子（著）『産学連携における大学初年次キャリア教育―地元企業交流を通じた自尊感情の醸成―』神戸学院大学出版会、2024年

<https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784899852339>

+++++
◇日本キャリア教育学会ニューズレターは、日本キャリア教育学会情報委員会が発行し、特集テーマに沿った記事を会員の皆様にお届けするものです。

◇会員の皆様のメールアドレス確認・登録を継続的にしております。身の回りの会員でニューズレターが届いていない方がおられた場合、学会事務局（jssce-post@as.bunken.co.jp）宛に受信用メールアドレスから登録申請していただきますよう、お伝えください。

◇ニューズレターに対する皆様のご感想・ご意見・ご提案を随時お待ちしております。情報委員会（jssce-ic@googlegroups.com）までお気軽にご連絡ください。

◇キャリア教育関連の著作を発刊・発表した会員は、是非とも学会事務局まで献本いただければ幸いです。学会ウェブサイト上に書名と著者名を掲載した上で、書評欄で取り上げさせていただきます。

◇文中敬称略

日本キャリア教育学会情報委員会 発行
委員長：京免徹雄 副委員長：家島明彦
委員：市村美帆、高丸理香、竹内一真、
橋本賢二、本田周二、松尾智晶、
丸山実子、三保紀裕

-+-+-+-+-+